

報告番号

※ 乙 第

号

主 論 文 の 要 旨

論文題目

認知の変容を促す対人的相互作用過程に関する研究
— 自他の相対的視点の獲得に着目して —

氏 名

吉原 智恵子

論 文 内 容 の 要 旨

「目から鱗が落ちる」という諺は、何かを契機としてある対象に対するこれまでの知識や信念が変化し、その対象についてよりよく理解できるようになることを意味している。したがって「目から鱗が落ちる」経験は、ある対象に対する理解が促進される、個人にとってはプラスの効果が期待される経験と考えられる。しかし私たちの知識や信念は維持され安く、これまで保有していた知識や信念に反する情報、すなわち鱗を落とす契機となるであろう情報は、容易には受け入れられないことを示す研究は多い。そしてその一方で、知識や信念の変化はどのような状況下で生起するのかを検討した研究は少ない。そこで本研究は、知識や信念といった認知の変容を生起させる要因についての検討を行った。そして特に社会的相互作用の過程における自他の類似性認知および相対的視点の獲得の効果に注目して議論した。

第1章では、認知の変容に関する研究のレビューを行い、本論文の目的を明らかにした。Piagetらの認知発達理論の流れを汲む研究からは、社会的相互作用が認知（概念）の変容に果たす役割を仮定することができる。一方認知的不協和の理論（Festinger, 1957）や自己確証過程に関する研究（Swann, 1983）等は、認知の変容が抑制されやすいことを示している。本論文では「目から鱗が落ちる」ことは生起し得ると考え、どのようなメカニズムが認知の変容を可能にするのかを明らかにするために、社会的相互作用における自他の相対的視点の獲得に着目した。そして他者に対して類似性を認知すること、共感できること、つまり他者と自己を置き換え可能な存在としてとらえ、自他を同じ土俵に乗せて互いを相対化する視点を獲得することが、認知の変容に与える影響について検討し、認知の変容を促す要因に関する示唆を得ることを目的とした。

第2章では、個人内過程における認知の変容可能性と、認知の変容を促す要因に関する仮説の導出について検討するために、2つの研究を行った。研究1では、対人情報を用いた印象形成の実験により、同一人物のもつ特性として相反する情報をどのように処理することができるのかを調べ、処理様式を分類した。これにより統合的な処理がなさ

れ得ることを確認した。そして処理様式間の関係について検討するため、処理様式と対象（刺激人物）への認知内容との関係を検討した。さらに研究2では、この処理過程を既定する要因として刺激人物に対する類似性の認知および共感の作用について検討した。この類似性の認知や共感は、自己と刺激人物とが同じ土俵に乗り得るとの視点を持ち、自他の相対的關係性が想定されているか否かを示す指標と考えられる。

第3章では、個人内過程に影響を与える実際の友人間の相互作用過程について検討を行い、自他の相対的視点の獲得の重要性について議論した。研究3では、親しい友人とのコミュニケーションを通して、自他を相対的に比較する過程を経ることにより自己と親密な友人への認知が同次元で評価されやすくなることを予測し、自発的特性生成課題（Deutsch & Mackey, 1985）を用いて調査を行った。大学生を対象として調査を実施した結果、親しい友人と知人という親密さの違いにより、自己認知と他者（友人）認知のスキーマの類似性が異なることが示された。これは親しい他者との間において互いの認知を規定しあう関係が成り立っていることを意味している。さらにこのような関係性が確認されたことは、互いの認知的図式の変容を規定し合っていると見ることができる。

第4章では、個体間の影響過程における相互的な認知の変容可能性について調べるために、対立意見をもつ二者間の生産的な討議過程に注目し、自他を相対化することの効果を検討した。ここで生産性とは、自他双方の意見内容を精査する方略のことを指す。持論に固執して相手の意見内容を排除するのではなく、相手側の意見をも尊重し、双方の意見内容の良し悪しについて検討することを意味する。研究4は、非対面場面および対面場面における二者間の討議過程の分析を行った。実験の結果、非対面場面では、合意が強く求められる状況下で自他を相対化することにより、論点が多様化する傾向及び相手の意見がもつ利点に言及して両面的に討議する傾向が示されるなど、相対化することの生産的な促進効果が生じていたのに対し、対面場面では生産性を抑制する効果が示された。但し研究4は、直接認知の変容を測定するものではなく、本研究の示唆し得る範囲は限定される。その他、今後の課題についても考察した。

第5章では、認知の変容をもたらす対人関係は、社会的距離（perceived social distance）の近い他者に限られるのか否かを検討した。このことから、自他を相対化する対象の範囲の広がりについて議論した。研究5では、他者を自己に類似しているとみなす社会的投射（social projection：SP）が、身近な人ばかりではなく、外集団に属する社会的距離の離れた人を対象とする場合にも起こり得るかを検討した。実験では学生を対象として、学生集団および社会人集団に対する合意性推定を求め、当該の課題に関与性の高い集団への合意性推定が高くなることが示された。

これらの結果から、認知の変容に関わる社会的関係性は多層的に考える必要があること等を議論した。

そして最後の第6章において総合考察を行い、認知の変容を促進する社会的相互作用について、自他の類似性認知や相対的視点の獲得の観点から議論した。研究1から5により明らかにされたことを踏まえ、本研究の意義について次の4点から議論した。1点目は、認知の変容可能性を実験的に確認したことと、認知的に不斉合な情報の統合化の効果を、基礎的な処理過程に対応させて明らかにしたことである。2点目は、認知の変容過程における相対的視点の獲得に着目し、その効果を個人内の過程および個人間の相互作用過程においても検討し、今後の課題を含む示唆を得たことである。3点目は、自他の相対的視点を獲得するための操作的介入について、応用可能性を示したことである。討議過程における相対的な視点の導入は、自他を比較するといった操作的介入によって一定程度可能となり、非対面場面の初期対話において生産的討議を促進することが示唆された。したがって、意見が対立している状況下において合意形成が求められる際、非対面的状況での議論に互いを相対化する視点を導入することにより、生産的な討議へと方向づけることができる可能性が示されたといえる。4点目は、認知の変容を促す他者は、身近な人ばかりではないことが見出されたことである。社会的距離のある他者においても、課題性に応じて自己を投射し得る対象となる。このことは、従来の社会心理学において考えられてきた準拠集団や内集団の範囲を超える他者との関係性についても、相互的な影響過程を一層理解する必要があることを意味している。

またあわせて、本論文の課題や今後の展望について次の3点から議論した。まず1点目は相対化の視点を持ち得ることと相互依存関係との関係性についての検討である。近年に見られる広範な社会的ネットワークの中で生きる人々の相互依存関係は、対面的な関係性を前提としない場合も多いと考えられる。そのため従来の枠組みではとらえられない性質をもつことが予測される。それはどのような関係性であり、認知の変容にどのような影響力を持ち得るのか、また互いにどのような影響を与えあっているのかを明らかにすることは、重要な課題のひとつと考えられる。2点目は自他の相対化を導入することによる討議過程への介入について、応用可能性を追究することである。研究4における相対化の視点の導入は、構造化されたものではない。その上で一定の相対化効果は示されたが、より効果的に相対的な比較等、相対的視点を獲得する方法を検討する必要がある。3点目は上記のような応用可能性を追求するためには、さらに認知の内容に即した諸条件の整理が必要であり、また認知内容そのものを体系的に整理することが求められる。

これらは今後、さらに検討すべき課題である。